



Title	学校外の支援施設における不登校回復過程と支援構造 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	木下, 弘基
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7212号
Issue Date	2024-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93294
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	KINOSHITA_Koki_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：木 下 弘 基

主査 准教授 加 藤 弘 通
審査委員 副査 教 授 松 田 康 子
副査 教 授 平 野 直 己（北海道教育大学）

学位論文題名

学校外の支援施設における不登校回復過程と支援構造

本論文は、学校外の支援施設における不登校の回復過程とそれを支える支援構造を明らかにし、不登校支援の在り方について論じるものである。現在、不登校者数は年々増加傾向にあり、学校教育が抱える看過できない問題の1つである。これまで不登校の回復過程については、主として再登校を基準に、その支援の成否が考えられることが多かった。しかし、文部科学省（2016）が不登校への「支援は、『学校に登校する』という結果のみを目標にするのではなく」としたように、再登校以外の視点で、不登校の子どもの変化や成長を捉える視点も必要である。特にフリースクールや医療機関において、学校には登校していないが、子どもが変化していることをどのように捉え、評価すれば良いのかを明らかにすることは、その支援が子どもにとって効果的か否かを考える上では非常に重要な課題である。しかし、従来の研究では、この検討が不十分であり、不登校の回復過程は、どのような変化の過程を辿り、それはどのような条件において生じるかが不明であった。そこで本研究では、精神科デイケアやフリースクールなど学校外の支援施設を対象に調査研究を行い、支援者、及び子どもの視点から不登校回復過程に生じる変化とそれを支える条件として施設がもつ支援構造を検討した。

研究1では、不登校に関する先行研究を整理し、①実際に不登校児童生徒を対象とした研究、②不登校の回復過程、特に集団への再適応に注目した研究、③不登校の回復が生じる集団の条件や要因についての研究の3つが不足しているという課題を抽出した。研究2では、医療領域の施設である思春期デイケアを対象にした症例研究を行い、不登校回復過程に関する仮説的なモデルを示し、回復を場所・対象・活動の移行として捉え直す可能性を示唆した。研究3では、教育、医療、福祉領域など多領域にわたる学校外の支援施設へと対象を広げ、このモデルの妥当性を検討した。その結果、不登校回復過程モデルは、①支援者との関

わりを中心に新たな集団の中で居場所ができる段階、②対人関係や活動の幅が広がり、仲間集団での体験が増える段階、③個人の抱えている問題が表現され、集団に受け止められる段階、④支援施設の外の活動や進路選択など外の世界に目を向け始める段階へとより精緻に捉え直された。

研究 4 では、適応指導教室に通う児童生徒を対象に質問紙調査を行い、研究 3 で支援者の視点から得られたモデルを児童生徒の視点から検討した。その結果、児童生徒の視点から見ても、上記で示した不登校回復モデルが妥当なものであると判断された。さらに研究 5 では、学校外の支援施設に通い、回復過程を経た者の予後を検討し、良好であることを確認した。つまり、上記の不登校回復過程に関するモデルは長期的にみても妥当性を有すると考えられた。研究 6 では、不登校の回復過程が生じる条件として、学校外の支援施設がもつ特徴を支援構造という視点から検討し、不登校の回復過程が生じる支援施設の支援構造の要因、およびそれらの関係について検討した。以上の結果をふまえ、総合考察では、本研究で明らかとなった不登校回復過程モデルとそれを支える支援構造について不登校研究への意義を論じ、不登校からの回復について、再登校の視点とは異なる、移行の視点から捉える新たな不登校回復観を提示した。

審査委員会が評価した本論文の意義は以下の点である。第 1 にこれまで検討されることがなかった思春期デイケアを主な検討の対象とし、移行の視点を強調することで不登校の問題を徹底して、対人関係のなかで捉えようとしている点である。オンラインで学力を補うといった身体性を欠いた支援が注目されがちな現状において、本研究の視点は、子どもが人と人の間で成長、自立していくことを改めて認識させるものであり、不登校支援の幅を確保していく上で貴重なものである。第 2 に、再登校とは異なる移行という視点で、不登校の回復過程を明らかにした点である。これは、学校に行っていないという点で見過ごされがちであった不登校の子どもたちの成長を正当に捉えることを可能にしたと同時に、再登校という目標が難しい、あるいは再登校が子どもにとって必ずしも良いとはいえない状況で支援を続ける現場の支援者に、日々の実践を支える視座を提供するものであり、その実践的意義は極めて高いといえる。

ただし、回復過程が生じる支援構造論については、仮説の域を出ていないこと、加えて、再登校に代わって強調される「自立」という用語への考察をさらに深める必要があることなど、課題も残されている。しかしながら、この点に関しては、本研究の課題であると同時に、不登校研究全体が抱える課題でもある。したがって、今後の不登校研究の方向性を示唆しているともいえ、その貢献は高く評価されるべきものである。よって、審査委員会は著者が北海道大学博士(教育学)の学位を授与されるに値すると認めるに至った。